

生命の實相 第4卷

生命篇「下」

(129)

神理はなんじを自由ならしめん

『無門関』第三の公案に「俱胝豎指」という条がある。金華山の住持俱胝和尚はいかなる参門者があつて何事を問おうとも、ただ一本の指を豎てて示すのであつた。その指を見ても悟るものもあれば悟らずして去るものもあつたであらう。形を見るだけで真生命を見ない者は悟ることはできないのである。小僧某、一日外にありて人に問われて答うるに俱胝和尚をまねて一本の指を立てて示した。小僧某はこのとき俱胝和尚の形をまねたにすぎないのであつて、なにゆえ俱胝和尚が指を立てるかその真生命には触れていないのであつた。和尚これを聞いて小僧の立てた指を切り去つた。小僧は痛いので悲鳴をあげて逃げようとする。この時俱胝すかさず小僧の名を呼んだ。小僧は和尚がなにをいうのかと思つて振り向くと俱胝は例によつて指を立てて示した。それを見た瞬間その小僧は大悟つた。なにを小僧は悟つたか——それを知るものはその人もまた大悟ることができるであらう。小僧は自分に立てるべき指のある間は形にとられて真生命を見なかつた。が、今自分が指を切り去られたとき立てるべき指がない。しかも師の和尚はかくのごとく立てよと指を示しているのである。無い指をどうして立てるかここに禅の真生命がある、立てるべき指は形の指ではなかつたのである。指があつて立つような指なら指が無くなつたときには立

たなくなるであらう。本当に立つ指は指が無くなつても、なにがなくなつても立つ指でなければならぬ。和尚が示したのはなにが無くとも束縛されない自由自在の「生命の指」であつたのだ。これが無いと困るとか、あれが無いと困るとかいう者は「生命」の真相を知らない者なのだ。なにが無くとも少しも困らないのが、われらの「生命」の真相であるのだ。

郷土愛と祖国愛

郷土愛、さらにそれが大きくなつては祖国愛——それは超越的な汎世界的な立場からみまするならば、一個の執着の念だとも評されましようが、さらにそれを深く考えますと日本に生まれた日本人は日本を愛し善くすることによつて世界に奉仕し、人類に貢献すべきであります。日本人が日本的であることが、世界のためになるのは、桜の木が桜の花を咲かせることによつて人類を喜ばすのと同様であります。国民がその国土に生まれて、その国土から恩恵を受け、自分が現在安穩に生活を続けられてゐるのもすべて国土のお蔭です。国土の恩と同時に、その国土の開発につぶさに艱苦をなめつつ努力して來られた祖先の賜でもあります。この恩この賜の一切を否定してしまつて、祖国などはどうでもよい、祖先の意志などというものはどうでもよいものだというように祖国に対して反逆的思想をいだくということは、恩の否定、賜の否定、感謝の否定ということになつて、これは神の道——人の道ではないのであります。

愛の神による運命の修正

野心とは「我」を通すことであつて、愛とは「我」を殺すことにある。我を殺したときに一層大きな我が生きてくる。ナポレオンの偉業が滅びたのは、それは「我」を通す偉大さであつたからである。キリストが死んでかえつて限りなく生きたのは、神意に従う偉大さをもつていたからである。人間すべからく神に従う偉大さをもたねばならぬ。（智慧の言葉）

唯一本の神には神罰はない。唯一本の神は至善至慈至愛であり、唯一本の神は罪人を造り給わぬから、神の方から見ると罪人はひとりもない。したがつてまた神罰ということも決してないのであります。そうするとこの小森弘近氏のいわれる神罰というものはどこから来るかという、自分の心と、その心に感応して働く白山神のごとき霊界の諸霊の処置であります。神の子たる実相にふさわしくない念を起こしたとき、その念は本来「虚」の念、非實在の念、不自然の念であるから自然に消えて平らかにになり、本来に復帰しようとする運動が彼自身のうちに起こらねばならぬ。この運動が罪の自浄作用であつて一見神罰のような形をとるのであります。罪の自浄作用は高まる波の平らかならんとする運動に似ています。「悪さかなるときは天に勝つ」という諺もあるとおり、波は高まる時節には高まるのであつて波の高まる側の半面ばかりを見ていますと、悪でも順風に帆をあげて栄えてゆくように見えます。しかし、それは「虚の栄え」でありますから、必ず自然の水平に復帰するためには高まっただけの水量が下がる時が来るのです。悪を犯している最中は幸運であつたものが、いく年か経るうちにその

悪の報いを刈りとるべき不幸になるのもそのためであります。だから「積徳の者に余慶あり、導き起こしている場合もあります。守護霊も一個の霊積悪の者に余殃あり」ということは眞実であります。何者が余慶を与えたり、余殃を与えたりするかというと、これは内から本人の心（潜在意識）が余殃を与えるのであつて、本人の心の中に平らかならざるものが起こっている。その平らかならざるものを平らかならしめる自然の働きが起こつてくるとき、それが余殃という働きを起こすのであります。だからわれわれが神の子たる正しさにふさわしくない念を起こしたり、または行爲を行なつたりしますと、そこに曲れるものが直くなり、けわしきものが平らかになる働きとして、不幸というものに吸ひ寄せられてゆくのであります。こういうように不幸というものは、神の子たらざる二セ物の働きを帳消しする働きとして起こるのでありますから、罪の帳消しをせんがためにとて、かのインドのバラモン行者のように種種の難行苦行をみずから求めてする人さえもあります。また本人の難行苦行を求めなくとも、各人には自己を指導している守護の霊（多くは祖先または産土の神）が導いていまして、小森弘近氏の通信にあるように罪の償いを求め、時には種々の苦難をその人にであり、人間も一個の霊であります。この罪（すなわち、神の子たる実相の本来を包み隠わさざること）がいったん犯されたとその罪が許されるためには、病氣にかかるとか、貧乏するとか、家族に不幸が起こるとか、何事か自分が苦しまなければならぬという潜在意識的観念は、守護霊の心の中にも人間自身の中にも、ずいぶん牢乎として抜きがたく潜んでいるの

でありまして、この人類全体の信念は、「人間は刀で斬れば血が出る」という人類全体の信念にも劣らぬほどの強さで、各人の潜在意識の底に潜んでいるのでありますから、表面の心は罪の意識もなく、^{あがな}贖いの考えもなくとも、自己の潜在意識および守護霊の方で、苦しみによって罪を贖いたいとは必ず考えているもので、したがって時期来れば、潜在意識の底から種々の苦しみや不幸な境遇を、肉体の上に実現するような考えがフト思い浮かび上がって来るのであります。われわれの運命は、「フト思いつく」ということによって、ほとんどその不幸が決するが、このフト思いつくということは業の流転によって生ずる。商売をするにしても、何商売をするか、どの辺にある家を借りてどういう店構えにするかということは、この「フト思いつく」ということによって決まるのであります。その時に、繁昌しないような商売をフト思いつき、繁昌しないような位置の家を借りて、客のはいりくいような店構えを思いつき、そうして開店でもしますと、お客はさっぱりやって来ず、食い込む一方でさんさんの失敗を演ずることもなります。店の売上額でも、どんなにその日にしたばた励んでみても、前記の実例にもあるとおり、その日にあることは数日前には予知しうるほどに決っている。就職をするにしましても、新聞を見ているときに「求人」の広告がフト目につく、そしてそれに心を引かれて履歴書を送ってみたがためにその人の就職難が解決する場合もあれば、あいにく自分の適業の広告を眼の前に拡げながらも、ふとそれに気づかず、またたといそれに気づいても、なにゆえか心を引きつけられないために、履歴書も差し出さず、せっか

くの適業もものがしてしまって、いつまでも就職難に苦しむということもありましょう。またある機会に出遇った男女が、たがいに顔を見た刹那にフト心が動く、そうしてたがいに引きつけられる、その恋愛が終生その人の不幸の原因となって、しだいに悲劇的最後に導かれてゆく場合もありましょうし、それがまた非常に円満なる家庭を造って生涯を幸福にくらす^{もと}基になることもありましょう。いずれにせよ、われわれの運命の不幸の出発点はこの「フト思いつく」ということによって決まってくるのであります。そしてこの「フト思いつく」ということはどこから来るかといえますと、われわれの心の底――潜在意識の奥底から考えとか感じとかが、本当にフト浮かび上がって来るのであります。どういうふうにして「考え」とか「感じ」とかいうものが、心の底からフト浮かびあがってくるかといえ、それはラジオの受信機が鳴り出すように、外から来る怨みの霊や守護の霊などからの精神波動に感応してわれわれの心のラッパが鳴り出す場合と、蓄音器のレコードが回転するに従って鳴り出すと同じように、われわれの潜在意識のなかに集積されていた罪の蓄念盤^{レコード}が回転するに従って自己みずから鳴り出す場合とがあります。外から来る精神波動のラジオ的放送にわれわれがなにゆえ感応するかといいますと、われわれ自身の内にある心の波長が外から来る精神波動に合うからであります。自分の心と同じ波長をもった精神波動でないと、外からいくら放送されて来ても素通りしてしまうのです。それはJ O B K のラジオの放送に波長を合わせておいたラジオ受信機には、J O A K のラジオ放送がいくらあっても素通りしてしまうのと同じで

あります。そうすると外から来る精神波動に感じてなにかをフト思いつくというけれども、それも、元はそういう精神波動と自分の心の内にある想念の波長とが合っていたからでありますから、いろいろのことをフト思いつくというのも、元は自分の心にある。自分の潜在意識こころのおくそこにそういう精神波動と同種類のものがあるので、その精神波動を感じてフト思いつくのであります。そうするとわれわれの潜在意識の蓄念盤が自動的に動き出してなにかを思い出すにしましても、外からの精神波動の放送に感じてなにかを思い浮かべるにしましても、結局は自分の心の奥底の問題に帰ってくるのであります。それで自分の運命は自分が作ることになるのです。外から神がわれわれに罰を当てるのではない、自分の心が「心の奥底」から操っていて、わざと損になるような商売を思いつかせたり、悲劇的な最後にならねばならない相手に恋させたり、ちょうど汽車と衝突するような時間に自動車を出発させたりするのであります。自動車は汽車と衝突するのだって、その自動車が踏切を横切るのが一分間早くとも一分間遅くとも衝突するものではない、なかなかそんなに正確に衝突する時間を見計らって出発することはむずかしい。それは無限の「時間」という富籤とみくじちゆう中からたった一本の貧乏籤を引き当てるほどにむずかしい。そのむずかしさのなかから衝突するのにちょうど適当な時間を選んで出発したいということをおもいつかず微妙な働きをするのが、われわれの潜在意識なのであります。われわれの潜在意識は地下水のように、眼に見えない、気づかれないところにあつて、これからいろいろ起こつてこようという出来事の予兆よしを感じ、その出来事のうちに、自

分で選んだ出来事の方へグングンその人自身を引きずって行くのであります。「熟慮断行じゅくりやんこう」という言葉がありますが、熟慮さえすれば人間が幸福になれ、幸運を掴みうると思つたら大まちがいでありませう。かつて政友会幹事長久原房之助氏の令息と貴族院議員野村徳七氏の令息とが、自動車で外出して、阪急電車に衝突して二人とも重傷を負うて死んでしまった。この二人は一分間早くとも遅くとも死ぬことを冤れたのであつた。熟慮というものが人間の運命の上にはほとんどなんらの権利もないことはこれでもわかるのであります。われわれは自動車の出発時間というようなものをもう一分間早めるか遅めるかということ熟慮してきめることはできない。だから人間の運命は熟慮の圏外にあるといわねばならない。すべての人の運命は熟慮の圏外にあるところの漠然とした力によつて左右せられる、この漠然とした力はわれわれの外にあつてわれわれの運命を左右しているといへば、それはどうにもならない宿命論になつてしまふ。しかし、このわれわれの運命を決定する力は、先刻もいったように、われわれが自己内部から「フト思いつく」という自分の内から催して来る潜在意識でまゐる。われわれ自身の潜在意識というものはわれわれの識閥しきい下にあつて、知らず識らずのうちにわれわれの罪の自浄作用を起こしている。この自浄作用は五の罪があれば五だけの償いによつて浄まつてゆく、十の罪があれば十だけの償いによつて浄まつてゆく。「眼にて眼を償い、齒にて齒をつぐなう」旧約の贖あがないなのであります。潜在意識の自己審判は「二二ンガ四」「二引クニハ零」の数理的發展でありますからなんらの仮借もないのであります。しかしこれは

潜在意識の自己審判による罪の自力的浄化作用でありまして神の審判ではないのであります。われわれが罪の自力的浄化作用のみにて浄まろうとするときは、過去の集積の一点一面に対しても、それだけの償いをしなければならぬとしたら、なかなか人間は一代や二代では浄まりそうもないのであります。

潜在意識の自己審判による罪の自浄作用として、実生活に自然の運びとして苦難がはいってくるほかに、世の中にはみずから進んで苦しみを受けて自分の罪を神の前に贖おうとする人があります。しかしながら贖罪をもつて神の怒りをなだめ、神にあやまり、神の御機嫌をよくするために、人間自身が自己を罰し自己を苦めることだと思ふのは大変なまちがいです。贖罪ということとは、神に対して「自己断罪」と「自己処刑」とを見せびらかして、神の怒りを和らげることではないのであります。創造主なる神は愛の神でありますから、なんびとの苦しむことをも欲せられていないのであります。小森弘近氏の手紙にも「生長の家の神はやさしい方で許してくださいました」とあります。これを知らなければ本当の神を知るものではないのであります。キリスト教ではイエスが万人の罪にかわって磔けにかかり給うた、と申しますし、仏教では法蔵菩薩がわれわれの罪に代わって無慮無数の長年月の間苦しみ給うたと申しますが、それはなんのために？ と申しますと、それはわれわれの罪を贖うためだと申されているのであります。しかし罪を贖うということは神の怒りを和らげ、神をして人間に和解せしめるためにするのではないのであります。

宇宙の造り主なる神は、至慈至愛の神でありますから、怒り

とか憎しみとかいうような感情には決してとらわれ給ふことはないのであります。だから神の怒りを和らげ、神をして人間を和解せしめるために、みずから十字架にかかって罪を贖うということは、その意味をなさぬ不合理のことでもあります。

それならば、なにゆえイエス・キリストや法蔵菩薩のごとき方がわれわれの罪の身代わりとしてこの世に送られ、代贖者としてわれわれに代わって十字架にかかったり、無慮無数の長年月間いくだの苦勞を重ねられたかといえ、それは、神自身が人間の身代わりとなって苦しむことによって神の怒りを和らげ、神をして人間に和解せしめるようにしたのではなく、人間の潜在意識の自己審判觀念をなだめて、神の愛と許しを人間自身に受け入れやすしたのであります。なだめる相手方は神ではなく、人間の潜在意識の自己審判觀念であります。神はすべての場合において許してい給うが、「潜在意識の自己審判觀念」はなにも贖いなしには罪を許さない。それゆえに代贖者となつて罪を引き受け給う方が要るのであります。その人の「潜在意識の自己審判觀念」は、その人の代贖者となつて処罰を受けた者があつたと知つたとき、その人を無罪だと宣言して、罪の流転から解放してくるのであります。

そのわれわれの代贖者となり給うた方が神から遣わされたのであり、神御自身の御化現であるということがわかりますと、その神の方向に心が翻然振り向きますと罪が赦され、罪は消えるというゆえんも明らかになりましょう。これは所詮は罪が實在のものではなく、仮相の世界のものであつて光の方向を向けば暗は自然に消えるからであります。本当の光りの方向さえ向

けば、罪なる実体はもはやない。罪の実体がないということがわかれれば、潜在意識の自己処罰も不必要になる。それで潜在意識の自己処罰による罪の自浄にまかせておけば、病気や不幸や貧乏やいろいろの苦難をへて、はじめて罪の集積が浄められるはずですが、神に心を向け神に祈り神に結ばれることになれば、それほど苦難もなしに罪の集積が消えてしまう。それで苦難を受くべき運命のものも、苦難が全然なくなるか、よほど少なくなるのであります。これは光りの方向に向けば影が消えると同様であります。

牧師プール・エフ・ホートン博士の「祈りはきかれる」という実話は興味深いものがあります。氏はかつて一行とともにノルウェーを旅していた。一行中の婦人の一人が沼地の原野を探険中、ゴムの上^{オーバーシュー}靴を片足落としてそれがどうしても見つからなかった。この旅行の目的地たるベルゲンに着くまでは、新しく上靴を買い整えるということはできなかった。しかもこの沼地の探検は上靴なしにはとうてい不可能であった。だからこの上靴をどうかして見つけ出すか、旅程を変更するか、ほかに採るべき手段はなかったのである。

で、一行はこの失った靴を見いだすために手分けして、もと来た道を引き返した。どこで落としたものであろうか。林のなか、山の側路、多分通ったであろうところの山間林間の道を数時間さがして歩いたけれども、その上靴は見つからなかった。ついに一行は断念してホテルに帰った。

ところが、その日の午後になってから、一行中のホートン博士の頭にひらめいたのは「なにゆえわたしはあの上靴が見つ

りますようにと、神に対して、祈りを捧げなかったのだろう」ということだった。で、博士は祈った。祈りのうちに、祈りは聞かれたという確信が博士の胸にきたのでした。博士は一行をうながして、朝上陸した地点まで峽湾^{フヨルド}を漕ぎ上ぼった。そこで船を上げると博士はスタスタと一直線に歩み出した。と、そこに見よ！ 博士の眼の前に、失くした上靴が転がっているではないか。そしてそこは不思議なことには、いくどもいくども祈りなしに血まなこになって探した地点であつたのだったのです。

マサチューセッツ州の心靈研究家エリザベス・タウン女史もこれと同じような経験を書いているのである。ある日タウン女史たち一行四台の自転車は、市街からかなりへだたった郊外の坂道を縦列を作って馳せ下っていた。坂道は乾き切って灰のようになつていた。一行のうちの一台の自転車のチェーンの留め鉤がいつのまにか飛んだとみえてチェーンが外れた。すでにこの坂道を下りること四分の一マイル、チェーンが外れたときは丘にさしかかって速力がゆるやかになつていたので、乗り手は怪我もせず無事におりることができた。

さてチェーンの留鉤^{リベット}はどこで落ちて、どれだけ走ってから、チェーンが外れたかわからなかった。一行はいずれも今まで自転車で来た道を徒歩で引き返しつつ、血まなこになつて留鉤を探していた。灰色の砂深い坂道に灰色の留鉤——たれもそれを見つける者がなかった。その時エリザベス・タウン女史は「なにゆえ今まで神にそれを祈らなかつたのであろう」と気がついた。彼女は祈った。「神よ、あなたは留鉤がどこにあるかを知

り給う。あなたは愛の法則で宇宙をお造りになりました。求めるものと求められるものと愛相うのが愛の法則です。どうぞ神よ、わたしの眼とわたしの求める留鋳とが相会いますように。」エリザベス・タウン女史がこういつて祈っている間に、他の三人は留鋳を丹念に探しながら大分遠ざかっていった、女史は神にまかせて後からノロノロと歩いた。と、他の三人の者が今探して見いださなかったそのあとに、そこに灰色の砂の間から求めていた留鋳が覗き出していたではないか。

これと同じような出来事で、鍵を落してどうしても見つからなかったのが、神に祈ったところが、今まで、そこを探しても決してなかった同じ場所にポツカリとその鍵が載っていたという実談を、かつて和歌山の『生長の家』誌友井内章二君が誌友会で話されたことがある。また大阪の誌友北村勉氏は一行数名と共に大和の竜門岳に登られたとき、頂上のあたりで一行が渴を覚えて水を探したがどうしても見つからなかった。そこで北村氏は心のうちで神に祈った。と、氏は急に自分だけが一行に分れて、少し下へ下りて行きたくなかった。と、「そこに水がある」という言葉がどこからともなく聞こえてきた。見れば草叢くさむらに隠れて、滴々と清水が湧き出しているではないか。ほんの少量それは滴々として湧き出ているので、眼のよい人でもほとんど発見しえないほどの分量であったが、それを近視三度という北村氏が神に導かれたればこそまず発見したのであった。

わたしは本稿の始めに、「今日展開する人間の運命」というものは過去のその人の念の集積の現実化として、すでに前日以前に決定しているという多数の事実をあげた。そしてそれに続

いて今日の運命が今日の祈りによって改善されたと認むべき四つの実例をあげたのであります。(1) われわれの今日の運命はすでに決定している。(2) しかし今日の運命は今日の祈りによって改善される。この二つの一見相反するがごと事実はいかに解釈すべきものであろうか。どちらも正しい。われわれの「今日の運命」はすでにわれわれ自身の過去の念の自然的展開、自然的自叙作用、自然的自浄作用として高まれる波が、平らかに復する自然の作用として決定しているのであります。それは眼には眼を報い、歯には歯を報いる峻厳にして仮借なき「迷いの念の自壊法則」としてそうなるのであります。この「迷いの自壊法則」はそのように峻厳なものでありまして、因果は迷いの世界では破ることができない。十の罪には十の苦しみ、五つの罪には五つの艱なやみがあつてはじめて帳消しになるのであります。しかしながら、われわれが一たび神に祈りますときには、神は光でありますから、光の前に闇の世界の法則は消え、その迷界の法則は超越されてしまうのであります。そこに十の罪にも必らず十の苦しみが要らない、二十の罪にも必らずしも二十の苦しみがいらぬ。心が完全に百パーセント神に向くか、八十八パーセント神に向くかによって苦しきも全然不必要になるか、半分ですむか、いろいろに変わってくるのであります。罪の自浄作用にまかしておいたなら、いく年も肉体的痛苦を受け、千金を医者に払って家産を蕩とうじん尽した後でないと治らないような病氣でも、その半分の苦しみ、半分の費用、悩みで赦され救われることになる。『生長の家』誌友で、神に祈り、神に結ばれて、病氣その他いろいろの苦難が——それが当然であるべきは

ずのものよりも——非常に軽くされた実例が報告されて来るのもそのためであります。では誌友よ、運命の神メタフィジカルヒーリング癒治療をなすにはまず神に祈れ。今日の運命はわれらにとってはすでに決定したものであります。神の前にはなお修正の余地のあるものであります。いわんやわれら自身にとっても未決定なるわれわれの将来の運命が、われわれの祈りによる神への結びつきによっていかに改善良化されるかは論をまたないのであります。そしてわれらの祈る対象たる神は、すべての闇を照らす光なる神、すべての罪を許し給う無限絶対の愛の神でなければなりません。生長の家の神様はそういう愛の神の一顕現としてお現われになったのであります。

昭和八年一月九日、東京目白の友の家会館で生長の家東京誌友会があった翌日、誌友陸軍科学研究所長久村種樹中将の令夫人きみ子女史は、次のような尊い体験を下落合の松本肇氏宅で発表せられた——ある日女史はなにか紛失物をしたが、それがぜひ要るので、あちらのひきだし、こちらの戸棚と探し廻り、上の物を下へおろしたり、下の物を引き出したり、いろいろ苦心したが見つからない。その時女史は始めて気がついた——「神想観で紛失物を探してみよう。」さて女史は静坐「神想観」をすること十数分間、やおら起つと限の前の戸棚の小襖を開きたくなった。小襖を開いて見ると、はたして開いたすぐそこに「探し物」が載っかっていることが見いだされた。そこは先刻たびたび小襖を開いて捜したところで、そこに紙袋があり、その紙袋をたびたびあちらへやり、こちらへやりして捜しだのに見つからなかったのに、神想観後は不思議にその紙袋の前に求むる

「探し物」が載っていたのであった。心が調べばどんな探し物でも見つかるのである。

生命磁気を語る

谷口——わたしの考えでは、この掌から出る放射は放射物というよりも一種の磁力線に近いものであるうと思います。それは放射物は放射するにしたがって減るけれども、これは放射を練習するに従って殖えてくるからです。磁石鉄より生ずる磁気というものは、他の鉄片に磁気を伝えても自分自身の磁気は減らない、ただ磁気を伝えるためにする操作運動にエネルギーを要するだけだそうです。われわれが、人の病気を治療するために手のひらをあてているのもそれと同じで、ただ手をかざしたりさすったり、無理な姿勢をするために、肉体のエネルギーを消耗するだけで、そのためにお腹がすいたり、一定の姿勢をつづけるために疲れてきたりすることはありますが、手のひらの力が出ているから、自分の活力が減るということはないのであります。それから今まで発見された放射能は、鉛のような重い金属を透過しえない性質のものでありましたが、この手のひらから出る力はそれらをも透過する。するとこれは放射能類似作用というよりは、一種の磁力線類似作用ではあるまいかと思われるのです。磁力線には「磁マグネチックフィールド界」というものがあって、その周囲のある距離まで、中間に鉛があろうとなかろうと、その能力が及ぶけれども、それよりも遠距離のところへはおよばない。どうも手のひらの力にはそれに似たところがある。棒鉄片を、南北へ地球の北極南極の方向へ長期間むけておくと、自

然に、その鉄片が磁化して磁石になっていることがある。それと同じように、われわれも指先を正しく上方へ向けて、合掌を長期間直立させて置くと、手掌が磁化して自然に磁気的能力を発生している。もちろん、生命の磁氣的力と、鉄の磁氣的力とは別の力でありまして、無機物の磁氣的力は、地球が一個の大磁石であるというわけで、その磁氣的力は地球の南北の方向に流れている。ところがこの「生命磁気」の流れは、天地の方向に縦に流れている。だから、天地の方向に正しく縦に向けて置くと、「生命磁気」はすみやかに発生する。それで、姿勢の正しい人々は健康であり、姿勢の正しい樹木は健康であり、掌の力を発現するには、正しく手を縦の方向に合掌するのであります。